



発行・古平町史編纂委員会
編集・古平町史編纂室
第六十八号（一日発行）
平成七年五月一日

鮫場の古平風土物語 〔三四〕

古平平祭と『臍下丹田（せいかたんでん）』

『気△口術極意者』の海田田君 二

高橋 源 五口

神輿の順番は部落ごとに入れ替わるが、その先頭に立つ人の中に、カンカン照りつける真夏の暑さのなか、白緋（かすり）の単衣（ひとえ）に大きな熊の毛皮の袖無を着て、流れる汗を大漁手ぬぐいでふきふき、得意満面で歩いている背の低い建網船頭がいた。この熊の毛皮は、鯨大漁の特別功労賞として親方から貰ったものである。のっそりつそと歩く姿は熊のように見えた。

これを見ていた海田君は、『古平は熊が先立つ夏祭り』という一句を詠んで、「出来たど出来たど、文選に出すぞ！」などと、熱をあげていた。（当時学級では、『綴方鑑賞文選』という雑誌を購読していて、それに投稿するのが盛んであった）彼の詠んだ句には、本当に実感

がこもっていたことを今でも思い出す。

私もまた、『古平は熊もいっしょに夏祭り』と、詠んだのである。

× × × × ×
当時、新地町の本通り、郷社（ごうしゃ）琴平神社の近くには沢山の屋台や露店が出ていて、氷水・バナナの叩き売り・射的・玩具・わた飴などの店が立ち並び、多くの人出で大変な賑いであった。

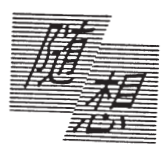
鯨干場や空き地には曲馬団の大きな小屋がかり、学校で引率して見に行ったが、そのほか剣舞・人形芝居（小学生十銭）・女相撲・ろくろ首やカッパの見せ物・猿芝居、一回り子ども十銭の、地獄極楽絵のぞき、の小屋まであった。客寄せの楽隊や鐘や太鼓の響き、木戸の拍子

木の音が入り交じって、お祭り気分をおおりにたてていた。

× × × × ×
わが部落の子どもたちは、午前中には学校引率で郷社の参拝をすませて家に帰り、昼食を食べるとまた見物に出かけるのであった。畑からサクランボやイチゴ、グスベリなどもぎ取る

と川に行つてザリガニを捕り、今度は本陣の浜でイソガニを捕って袋に詰め、片道六キロほどもある道を歩いた。

自分たちで食べることもあったが、大方は小屋の前につながられている猿にそれを投げ与えて



巡り来る 大火の思い出

渡辺 ハツエ

〔12〕

やっては、猿かに合戦？ をさせて、それを見て喜んでいたものである。

人形芝居の小屋を出たところに『臍下丹田気合術』の大きな看板があり、白はちまきに白装束の男が威勢よく口上を述べながら、火災の術・縄解き放しの術・飛び降りの術・刃渡りの術・針刺しの術などを気合いもろともやっていた。その早わざをじっと見ていた海田君は何を思ったのか、「ウン、おれ買う」と言つて、『臍下丹田気合術極意書』なるものを一冊十五銭で買ったのであった。

昭和二十四年五月十日、忘れることとの出来ない惨禍、またあの忌まわしい日がやって来ました。

思い起こして見ると、あの日は南西の風が強く吹いていて、風下にあったわが家などはあつた。あの時は危険から身を守るために、最後の手段として一家

七人が舟に乗って浜辺を離れましたが、高波と逆風にあつて、主人と弟の必死の努力によつてようやく安全な港内へ避難することができました。あの時、もしも舟の事故でもあつたらと思うと、今さらのように恐ろしくなつて身震いがします。

出火した時からずうっと手伝（次ページ三段目へ続く）

古平から初めての ボクシング国体選手

いつか書こうと思って忘れていた、去年の新聞の切り抜きが出てきたので、本人はもちろん古平の名譽のためにもぜひ紹介しておきたいと思って――。

昨年度国体でバンタム級準優勝富本慶久君、家族はご両親と妹さんが二人で、本人は古平中時代は野球の選手だった。

余市高校に入学してからボク

シングをはじめたようで、なかなかの美少年である。減量のためか、私のところから栄養食を買ったのでよく知っている。それにしても全国で準優勝するとは大変な偉業である。今年卒業だから、有名大学からスカウトされたことだろうと思う。お父さんも余市高校で、柔道の選手として活躍されていたので理解があったのだらうと思うが、本人はそれこそ血のにじむ努力をしたことでしょう。大学でも大いに活躍されることを期待し

たい。

それにしても、古平からボクシングの大選手が生まれるとは私にも想像できなかったことなので、紹介することができて大変うれい。

なお富本君は、昨年度、古平町体育連盟からスポーツ賞を贈られている。

若青葉大樹に育てふるさとのふと、こんな月並みな句ができました。私の精いっぱい応援歌として贈ります。

〔補記〕 富本君はその後中

故郷を想う 福井孝平

中央大学に進学し、去る四月六日から札幌で行われていたアマチュアボクシングの第四十六回全道総合選手権大会・バンタム級で見事優勝しました。バンタム級というのは、アマチュアボクシングでは体重が五十一キロ、五十四キロまでのクラスです。バンタム、というのは、もとは鳥のチャボのことなのですが、それから変わって「ケンカ早い小柄な男」という意味です。でも富本君は大変温厚な好青年ですので念のため……。

（前ページより） ってくれ

た伯母さんといつこのいたことを忘れて、自分たちだけが無我夢中で逃げてしまったことを今でも深く心で詫言っています。その後、二人とも難なく逃げ出して、港へ入った私たちを、荷車を引いて迎えに来てくれたのを見て本当に安堵したものです。それから、当時体が不自由だった亡夫と五才になった長男をまた舟に乗せて、浜町の叔父さんの家に身を寄せることになりました。

翌日から主人と弟は焼け跡の整理を始め、何日か経って、十坪余りの掘っ建て小屋がどうにか出来上がり、私たち一家はそ

鯨の不漁で鯉の刺網 のうこと



私が小学校のころ、古平の浜には、川崎船、と言われる船が沢山ありましたが、その船についての思い出も残っています。昭和の初めころから急に鯉が獲れなくなつて、鯉漁をしている人たちがばかりではなく、町中の人たちが不景気で大変困りま

こへ引越したのです。叔父さん宅には一か月余りも何かとお世話になり、すっかり迷惑を掛けてしまいました。役場からは台所用品も支給になり、親戚や知人からのお心遣いを頂戴してどうやら生活の基盤もできたので、主人たちは残された一隻の舟を頼りにして、また漁業に取り掛かりました。火災当時中学三年生だった末の弟は美国町方面へ遠足に行っていて、火災に遭った友達といっしょに美国のお寺に一晚お世話になりましたが、みんなそんな思いで一夜を明かしたことが、遠いそのころのことを思い出しています。

竹内 ユト

（次ページ三段目へ続く）

遙かなる故郷の思い出

8

榎橋 義我 春谷

十八、サーカスの話 (上)

浜町の小学校に通っていた昭和八年ころだったか、古平へ初めてサーカスが来ることになった。なんでも日本一の曲馬団というふれこみで、張つてあるピラも畳一枚ほどの大きさがあり書いてあることは、世界最大のにしきへび・ライオン・おおかみ・カンガルー・火食い鳥などで、どんな大きなサーカス団かと学校の行き帰りの子どもたちの話題であった。

古平ではお祭りになると、見せ物小屋が何軒も新地町や丸山町に建つが、サーカスだけはまだ一度も来たことがなかった。少年雑誌などでサーカスとはどんなものかは多少予備知識があったが、とにかく早く見たいというのが子どもたちの願望であった。そのサーカスの建つ場所も、「新地だ、いや丸山町だ」と噂が乱れ飛んだが、結局丸山町で、しかもそれがわが家の真ん前の粕干場に決まった。学校でも、全校生徒のほとん

どが先生に引率されて見に行つた。入場料は割引で十銭だったと記憶している。雑誌で見たサーカスは、象や熊の曲芸・空中ブランコ・綱渡り・オートバイの曲乗りなどがあつたが、このサーカスではそんなものもなくライオンの輪くぐり、カンガルーと人間の拳闘、着物に袴をつけたおっさんが、赤錆の刀で剣舞、そして厚板に五寸くぎをたくさん打ちつけて、その上で自称三十貫の重さの俵を口にくわえて見せるというもので、何てことはない移動動物園か、お祭りによくあるインチキくさい見せ物まがいのものであつた。期待が大きかつただけにがっかりしたが、見たことのない動物を見ただけでもまあまあだと思つた。

このサーカス団に、カンガルーと拳闘をやる十七才のお兄ちゃんがいだが、偶然、私の家の前ではつたり会つた。手に竹籠を持っていて、「どこかこの辺

(前ページより) と思つたものでした。

家では八人の子どもがおり、一家の生活のためにも父は川崎船という船を買つて来て、それで鰈の刺網漁を始めました。川崎船というのは、鰈の起し船と磯舟の中間ぐらいの大きさですが、舳先(へさき)がとがったような感じで、スピードの出る船だということです。

沢江あたりでは、一人で漁をする人と、二、三人が乗り組んで漁をする人がいたようでしたが、父は若い人を二人雇つてやっています。

父は早朝起きると、先ず外へ出て日和を見ます。母は毎日のように午前三時には起きて、朝食の用意です。暖かいご飯にみそ汁は欠かせません。そして父

りで、沢山草の生えている所がないかね」と聞かれた。カンガルーに食べさせるのだそうだが、それなら神社の裏の丸山の下がよいと思つて案内をかつて出たが、実はこのお兄ちゃんに關心があつた。世の中には悪い大人がいて、子どもをさらつて来ては、サーカスに売り飛ばして金もうけをしているヤツがいると

を沖へ送り出すのですが、今のようになんか音ではなく、櫓(ろ)を漕ぐ音が静かにするだけです。船頭の父は艦(とも)で櫓を漕ぎ、あとの二人は船の両側でそれぞれ櫓を漕ぎます。櫓を漕ぐ時は軍手の指を切つたようなものをはいていますが、漁師の人たちはみな手にひび割れやすけい傷が絶えないで、そこへ膏薬(こうやく)を貼つたりして、痛々しい様子だつたことが強く印象にあります。

出漁した後は、家族には陸廻り(おかまわり)の仕事があります。昼近くになると、家族が総出で帰つて来る船を浜で出迎えます。自分の家の船をいち早く見つけると声を上げて無事を喜び、「今日の漁はどうか」と胸を躍らせるのです。

か、そんな話を本で読んだことがある。このお兄ちゃんも、きつと悪いヤツにさらわれて来てサーカスに売り飛ばされた、かわいそうな過去のある人かも知れない——と、勝手にそう思ひ込んでいた。



惜しまれる才能 悠々自適の梅村さん

池田 テル

町が鯉の大漁で賑わった大正の中ころ古平は風光明媚で活気があり、住みやすいところだといと聞いて、本州からあこがれてやって来たという人がおりました。梅村綜一郎さんといひ、昔で言えば土族の家柄で、礼儀正しく、読み書きはもちろんのこと、書や水墨画なども素晴らしいと評判でした。何事にもよく学び、よく考える人として、「わからないことは梅村さんに聞け」とまで言われるほどの人で、道を歩いていても「ああ、そうか」「なるほど……」などと独り言を言っ

て自問自答をしていました。声をかけても黙って行ってしまおうで、「梅村さん……て変人——」と言う人もいましたが、また、町の名物のような人でした。浜町の学校の下の方に住んで

いました。あとで、町はずれの小さい家に一人で住むようになりまし

た。頼まれると襖（ふすま）や屏風（びょうぶ）などの張り替えもしていましたが、ほとんどの時間は机に向って静かに本を読んだり、詩を吟じていました。また、縁起もののお札を書いたり、年の初めとか春秋の彼岸のころになると、神主さんに似た装束をして、戸口に立って「家内安全」と唱えては御幣（ごへい）を振ってお祓いをし、お札を配って、そのいくらかの報酬で暮らしていたようです。とき

どき、近くで遊んでいる小さい子どもたちを呼んで自分の家で食事をさせ、行儀が悪いと注意するなど、きちんとした生活ぶりでした。

この度、小樽で開かれた『山下清展』を見てきました。天性を引き出されて有名になった絵の数々にすっかり感動して、あの梅村さんのことを思い出し、梅村さんの隠された才能を誰も見つけることができなかったことを残念に思いました。

晩年になって、例のように町内を回り私の家に来た梅村さんに母が酒をすすめ、父といっし

「△▽日はほんな日」

札幌自動車路線が延長 余市・古平間にバスが走る

〔昭和3年〕

古平の人にとって、鉄道の走る余市までの交通の不便なことが悩みの種で、これを解消しようとして「積丹半島に鉄道を——」というのが住民の夢でした。

昭和三年五月、札幌を中心にバス事業を営んでいた札幌自動車合資会社が、余市・古平間に初めてバスを運行しました。フオード社の幌型五人乗りの中

古車で、余市駅前から新地町までの約二十九キロを一時間半で走っていましたが、雨の日は運休で、一日の運行回数にははつきりしません。料金は大人一円五十銭・子ども七十五銭でしたが、大工の手間賃が一日二円ぐらいの時でしたから大変高い乗り物であったわけ

よに楽しそうに話っていたことが懐かしく思い出されます。（梅村綜一郎さん、明治十四年十月二十日生、生地は不明、太平洋戦争前に小樽に転居、昭和三十一年十一月二十五日死去）

そのころ、鯉漁を中心に事業をしていた種田富太郎も、古平へ余別間のバス営業をしていましたが、札幌自動車合資会社はこれも買収して、バス路線をさらに余別まで延長しました。

余市・古平間を定期バスが走る前の昭和二年（以前か？）、政友会総務の秦豊助（後に初代拓務大臣に就任）が積丹半島視察の時、余市からハイヤーで来ました。これは種田富太郎が当時五千五百円で購入したものでした。湯内峠を通った時に、随行した道庁の神保道路課長に「このがけ道を通るのは命がけだ」と叫んだそうですが、そのせい

いか、その後がけ道の改修工事が行われということ。またこの年、入船町の山口浪さんもハイヤーで山道を越え古平に嫁いで来ましたが、この時の沿道の様子が八ミリフィルムに収められていて、貴重な資料として残されています。